
光と闇の足跡

箱庭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の足跡

【Nコード】

N0207L

【作者名】

箱庭

【あらすじ】

文明が誕生してまだ間もない太古の時代。人類は絶滅の危機に直面していた。

突然起こった天変地異により海が荒れ、山が崩れ、空が陰り、緑は枯れ果て、食料難から争いを繰り返す日々。裂けた大地からは魔を帯びた異形の者が姿を現すようになり人々を脅かし始めた。

すさみきった人の心に残された希望は神への祈りそれだけだった。

しかし、ついに祈りは神へと届いた。天から舞い降りた神は全てを

本来あるべき姿へと地上を戻し人々は危機を脱したのだ。そして再び神は遥か天空へと帰っていった。

それから数千年…。

時代はまた大きな歪みを呼び戻そうと動き始める。

第1話

アキドが村に着いたのは夕方だった。すでに太陽は地平線に触れ辺りが随分と薄暗くなっている。小さな村だが幸い宿があったのでほっとひと安心した。今夜は野宿をしなくて済みそうだ。

「いらっしやい」

宿の扉を開けると主人が出迎えてくれた。質素だが小さな村には十分過ぎるほど立派な宿だ。

「部屋空いてる？」

こんな田舎村で満室とは考えにくいが一樣聞いてみた。

「ああ、大丈夫だ。一泊銀貨一枚だよ」

「わかった」

背負っていたリュックの中から銀貨を取り出しカウンター越しの主人に手渡した。銀貨を受け取った主人は宿泊客の名前が書かれた名簿を用意し、アキドもそこにサインする。

部屋数にしてはけっこうな人数が宿泊しているようで名簿の空欄がアキドを含めて二部屋分しか残っていなかった。

「こいつが部屋の鍵だ。部屋は203号室を使ってくれ」

「ありがとう。ところで御主人？」

「なんだね？」

主人の後ろの壁には鋭く先端が尖った大きな動物の角が飾られていた。ずっと気になっていたアキドは指を差しながら尋ねた。

「後ろに飾ってある大きな角は何の角だい？」

「ああこれは一角獣の角だよ」

「一角獣？」

「この辺じゃあ有名な珍獣でね。真っ黒い狼のような体つきをしていて額にこういう角が一本生えているのさ。大きいものになると1メートル以上もの長さになるんだ。これは60センチそこそこしかないけどこれでもけっこう貴重なものでね」

「へえ」

主人は自慢げにそう話した。

鍵を受け取ったアキドは階段を上がり203号室がある二階へと向かう。部屋に入るとベッドの脇に荷物を下ろして一息ついた。

「腹減ったな…」

腹の虫を鳴らせながらベッドに腰掛け窓から外の景色を眺めてみる。灰色と紫色が混ざった空には無数のコウモリが忙しそうに飛んでいた。辺りは静かな草原が広がっていて、その先は深い緑を有した山々が連なる。暗い空とたくさんのコウモリが重なったそれはまるで人の侵入を拒んでいるかのようにも見えた。アキドはしばらくその

風景を眺めた。

やがて太陽が完全に沈み夜を迎えると一階のほうから食欲をそそるいい匂いが扉の隙間を抜けて漂ってきた。そろそろ夕食の時間だな。そう思った矢先…

「コンコン…」

と、誰かが扉をノックした。

「アキドさん、夕食の準備が整いました。一階の奥にある食堂までいらっしゃいまし」

扉の向こうから聞こえてきたのは年配らしきしゃがれた女性の声。

「すぐ行きまーす！」

待つてましたと言わんばかりに勢いよくそう答えた。

「きたぞきたぞ！」

机の上に置いた短剣だけを腰にぶら下げアキドは部屋を出た。そして逃げもしない夕食を追いかけるかのように階段を下りていった。

食堂では細長いテーブルが三つほど並んでいて、すでにナイフやフォーク等がぶつかり合う金属音が鳴り響いていた。他の客はすでに全員揃っているようでアキドも適当な席を見つけて運ばれてくる料理を待った。

少し経って腰を曲げたお婆さんが料理を運んできた。

「どうぞ」

お婆さんはカートに乗せている料理を丁寧にアキドのテーブルに並べていく。

「いただきます」

アキドが手を合わせるとお婆さんはニコッと微笑み、ゆっくりとした足どりでまた厨房の方へと戻っていった。

皿に盛られた料理はなんともボリュームがあつた。肉と野菜をふんだんに使用したものでとても栄養バランスがよさそうだ。アキドはまずスープをすくいあげ口の中に含んで多少の潤いを与えた。そしてフォークに持ちかえると肉と野菜の料理を一気にかき込んだ。途中でパンをつまみながら何度もフォークが往復する。そして全てを胃に流し終え最後にグラスの水を飲み干した。

「ふうー、やっと生き返つた気分になつたよ」

天井を見上げ胃に溜まつたガスを大きく吐き出す。

食後の満足感に浸りながらしばらくその場でくつろいでいると一人の男が近づいてきてアキドに話しかけてきたのだった。

「お前さんは何を狙いに来たんだ？」

「狙う？」

男が発した唐突な質問に理解を示せないアキド。

「またまたとぼけやがって！狩りのことさ。お前さんも大物狙って

「ここに来たんだろ？」

なかなかいい体格のこの男はどうやら狩人のようだった。

「俺は違うよ。狩りをしにこの村に来たわけじゃないんだ。」

「なんだ違うのかい…。短剣なんて腰に下げてるもんでてつきり狩人だと思ったよ。しかし狩り以外でこの村に来るなんて珍しいな。」

「そうなのかい？」

「ああ。ここに泊まってる連中はお前さん以外全員が狩人さ」

確かに似通った男達ばかりだと感じていたが、この男の言うように皆野性味独特の雰囲気があった。

「この付近は他じゃあまり見られない大物がけっこう潜んでいてな。こうして俺達狩人は遠方から集うんだ」

「なるほどね」

この村は狩人達の間では名の知れた場所らしく、獲物の動きが活発なこの時期に出稼ぎのため訪れているのだという。

大型の獣が数多く生息していて狩りには申し分ない場所だそうだがそれ以上に危険も孕んでいるという。大型の獲物は簡単に人を殺傷できるだけの力がある。

狩人ではないアキドを珍しく思ったのか男はその後も自らの体験談を語り始めた。寝るまでにはまだ時間があるので、おやつの実をほおばりながらアキドは話を聞いていた。

「ところでお前さんはなんだってこの村に来たんだ？観光ってわけでもなさそうだが」

皆、そろそろ自分の部屋へ戻りだした頃男は最後にアキドがこの村にやってきた理由について尋ねた。

「いや観光みたいなもんだよ。この近くに古い遺跡があるって聞いてね。そいつを見にきたんだ」

「遺跡？そんなものあったかな…」

男は腕を組みながら首を傾げる。地理に詳しい狩人が知らないということはよほどの奥地にあるか、それとも存在自体していないか。

「何にせよもし周辺の山に入るつもりなら気を付けな。あまり深入りすると凶暴な肉食獣どもの餌になっちまうからな」

男はハハハッと笑ってみせたがあながち冗談でもないようだ。それはこの男の腕に刻まれたいくつもの古傷が物語っていた。

部屋に戻ったアキドはリュックから紐で固く封がされた小さな木箱を引っ張り出し机に向かった。木箱の中には一冊の古い書物が入っている。その書物は繊細に扱わなければすぐに破れてしまうほどにボロついており、表紙に書かれた文字はすっかり霞んでしまっていた。

アキドは書物を開くと次々にしかし慎重にページをめくっていく。文字ばかりだったものがやがてよくわからない記号へ、そして動物の絵が描かれたページへ移った。その絵は動物というより凶暴な魔獣に近い。指でなぞりながら一匹一匹を細かく調べていく。そして額に角が生えた一匹の獣の上でアキドの指が止められた。

「こいつかあ。間違いない、主人が言っていた一角獣とかいう動物だ。にしてもこれじゃあ魔獣に近いな」

多少誇張して描かれているとはいえ大きな牙が覗いていたりと非常に獰猛さが伺える。

「このページに描かれている動物は出現する可能性がある。よく調べておいたほうがいいな」

他にも数種類が描かれているがみな似たような印象で特に翼の生えたワニに見える生物なんかは危険性極まりない。

眠い目を擦りながらアキドは書物を読み更けつていた。

次の日、昨日の夜更かしと旅の疲れが重なり昼近くになってようやく目が覚めた。太陽はすっかり真上に昇り、聞こえなくても自然の賑やかさが気配で外から伝わってくる。

完全に覚醒しきっていない意識の中で荷物をまとめ、アキドは部屋を後にした。

「随分遅かったねえ。あんまり遅いんでどうしちゃったのかと思ったよ」

「昨日はちょっと疲れてたもんで…」

アキドは部屋の鍵を主人に返した。

「そうそう、実は俺この辺りにある遺跡を訪ねてこの村に来たんだけど御主人は何か知らないかい？バルバル人っていう古い民族が残

したものらしいんだけど…」

「バルバル人？」

主人は額に手を当て何か思い当たる素振りを見せた。

「うーん、確か十年以上前にも君と同じようなことを言っていた人がいたような…」

「それつてもしかしてこの人じゃなかったかい？」

アキドはポケットに忍ばせておいた四つ折りの紙を出し主人に広げて見せた。紙には眼鏡をかけた頭のよさそうな男性の似顔絵が描かれてある。

その絵を見たたん、途切れていた主人の思考回路が見事一本の線に繋がった。

「そうそうこの人だよ。この人が君と同じことを聞いて一度うちに来たんだよ。確か学者だったよねこの人。普段そんな珍しい人は来ないから今でもよく覚えているよ」

目を見開きながら思わず主人に詰め寄るアキド。

「本当かい？それでその人どうなった？」

「さあねえ。うちで一泊してその後はどうなったか知らないなあ。その何とかっていう遺跡を探すようなことは言っていたけど…。彼を見たのはその一度きりだったはずだからねえ」

残念ながらそれ以上のことは何も知らなかった。

「ありがとう。色々参考になったよ」

主人に礼を言い、玄関のドアノブに手をかけたアキドを慌てた声が引き止める。

「おっと待ちなさい！」

主人だった。

第2話

「君もその遺跡を探すつもりなら村長を訪ねてみるといい。あの方は村一番の物知りだし、ひよっとすればその学者も村長を訪ねているかもしれないよ」

そう言うと主人は村長の家の場所を教えてくれた。村長の家はここから見える位置にあるらしく赤い屋根が特徴的ですぐにわかることだ。

「わかった、村長だね。さっそく行ってみることにするよ」

わずかながらも貴重な情報を得たおかげで重たかったまぶたもすっかり軽くなりアキドは宿を出た。

目覚めてすぐの昼の直射日光はキツかった。外に出て思わず光を片手で遮る。

太陽の輝きが周囲の雲を消し去ってしまったような青々とした空だった。時折り吹き抜ける涼しい風が心地いい。

アキドは背中のでれたリュックを背負い直し村を見渡した。主人の言った通り右手の奥にある民家の向こう側に赤い屋根が顔を出している。村長の家だ。

両脇に雑草が生える小道を進み、アキドは赤い屋根の方へと歩いていく。

民家の裏手に回り、その先の石段を上がった小高い場所に村長の家はあった。さすがは村長の家と言ったところだろうか、玄関の扉が他とは違い高級感がある。ダークブラウンの木材を使用した少し重そうな扉だ。

「コンコン。すみませーん！」

さっそく扉をノックするとしばらしくしてかっぱづぎを着た女性が姿を見せた。

「はいはい、どちら様でしょうか。あら!？」

近所の知り合いが訪ねてきたのかと勘違いしたようで女性は初めて見る身に覚えのない顔に一瞬目を点にさせた。

「俺、アキドっていいいます。実はある遺跡を探していてそのことで村長さんに聞きたいことが…宿の主人に村長さんが博識だと聞いて訪ねました」

理由を述べると女性はすぐに優しい顔に戻った。

「まあそうだったの!こんなお若い方が来るなんて珍しいわ。父に聞きたいことだったわね。どうぞ中に入って」

女性は快くアキドを招き入れ村長がいる部屋まで案内してくれた。

「お父さん、客人がいらっしゃったわよ」

天井から垂れ下がる仕切り布の向こうで村長はミルクを片手にくつろいでいた。床に敷かれた毛皮の絨毯がなんとも暖かそうだ。

「このアキドさんがお父さんに聞きたいことがあるって訪ねてきたそうよ」

村長も歳の離れた客人に随分と驚いた様子だった。

「ほほう、こんな若いのがわしに用とは珍しいのう。ささっどうぞ座りなされ。アレサやこの客人にミルクを」

「はい」

女性がミルクを取りに向かうとアキドも絨毯の上に腰を下ろした。

「アストリアから来たアキドといいます。実はある遺跡のことについて村長に聞きたいことが…」

「なんとアストリアとな。わざわざそんな遠い所からのう」

長く延びた白髭を触りながら久方振りの話し相手に心なしか嬉しそうな村長。

「単刀直入に聞きますが村長はバルバル人の遺跡というのは知りませんか？この辺りにあると思うのですが」

「なに！？」

その名を聞いて、口元に運ばれようとしていたミルクの動きがピタリと止まる。

「お主、今バルバルの遺跡と言ったか！？」

「よかった。何か知っているんですね」

明らかに心当たりがあるように見えた。しかしどういわけか村長

はささやくような小さい声で口を開くのだった。

「その遺跡のことは村の者から聞いたのか？」

「いえ違いますけど。どうしたんですか急に？」

と、その時ミルクの入ったカップを手にアレサという女性が部屋に入ってきた。

「どうぞアキドさん」

「あつ、どうも」

軽く会釈をしながらミルクを受けとると女性はすぐに部屋を出ていった。

変に無言の間が続く…。

そんな空気を掻き消すようにアキドは話しを進めた。

「遺跡のことは自分で調べました。遺跡に関する古い資料を持っている友人が居たので」

目を少し細め小刻みにうなづく村長。

「あの知っているなら教えてくれませんか？俺、その遺跡を探してこの村まで来たんです」

村長は視線を落とし何か思い止まる様に黙っていた。アキドがもう一度声を掛けようとするとうとすると決心したかのように村長はその重い口を

開くのだった。

「悪いことは言わん。あの遺跡に行くのはやめなさい」

「え！？」

「あの遺跡の周辺は魔獣どもの住み家になっておつてな。随分前に遺跡を探していた学者が山に入ったり戻ってこなかったのだ。あまりに危険な場所ゆえ、昔遺跡にまつわる書物を全て回収したのじや。今となつてはあの遺跡を知る者はこの村でわしぐらいのもんでのう。」

「もしかしてその戻つてこなかった学者つてこの人じゃなかったですか？」

アキドは宿で見せたあの似顔絵の紙を村長にも見てもらった。

「こ、こやつは！」

似顔絵を確認した村長の表情がハツとなる。

「お主はこの人物とどういった関係なのじゃ？」

「いえ、特に深い親交はないですが彼は著名な学者で俺も少し考古学をかじってますから彼のことはだいたい知っているんです。尊敬に値する人ですよ」

「そうか…」

二人は互いにミルクをすすった。村長は遠くを見つめるように顔を

上げやがて遺跡のことについて語り始めた。

「古代バルバルの民は悪魔と契約を交わしたとされる呪われた民族。契約で得た力によって周辺諸国の脅威から国を守っていたと伝えられている。山に生息する魔獣どもはその名残とも聞いた。バルバル人は様々な伝説を残しているが、どうやら学者が探しておつたのはその伝説にある再生の泉だったようだな」

「再生の泉？」

「そうじゃ。悪魔との契約で得た力のひとつとされるものでどんな病気、怪我だろうとその泉から湧き出る水を口にすればたちどころに治してしまうという魔法のような泉のことじゃ。学者の男はどうしてもその泉を見つけたかったようだな。病気の妻を治すためと言っておつた。結局男が戻ってくることはなかったが…」

「……………」

話を終えた村長は我に返ったかのように壁の向こうを見ていた視線を元に戻し口を閉じた。小窓で揺れるカーテンだけが部屋の静寂を唯一乱していたのだった。

そして…

「何度も言うようじゃがバルバルの遺跡には近づかんほうがよい。まだ若いお主がむざむざ命をくれてやることはないじゃろう」

身を案ずる村長をよそにアキドの表情は少しも変わっていないかった。

「お言葉を返すようですが俺はこれまで様々な遺跡を訪れ旅をしてきました。中にはこの遺跡のように危険な場所もありましたよ。命

を天秤に賭けたことさえあります。でも今は危険よりもその遺跡に対する興味の方が強い」

あまりに真つ直ぐに見据える瞳の前に村長も感服せざるを得なかった。何よりあの時の学者と同じ瞳を連想させた。

大きく息を吐いた後、村長は遺跡の場所について言及した。

「わしも直接行ったことはないのな。祖父に聞いた話じゃ」

昨日、アキドが宿の窓から眺めていた山々。その先を越えた麓の森にバルバル人の遺跡はあるという。狩人ですら山の向こう側に行くことはないらしくそのため遺跡の存在を知る者はほとんどいないとのことだ。

「山に登るには狩人達が使っている山道を通るとよからう。だがそれも山の途中止まりじゃ。山頂まで辿り着くには危険な獣道を進むしかないからのう」

昨日見た山の様子をアキドは思い出した。あそこにある獣道はやっかいそうだ

「山頂のどこかには赤い葉を生やした針葉樹が群生する場所があるらしい。もしそれを見つけたならそこで夜を待つのだ。そこから聞こえてくる一番高い魔獣の泣き声の方向へ降りていけばよい。その先の麓の森に遺跡があるとのことじゃ」

「ちょっと待ってください、今メモを取りますから」

ようやく掴んだ遺跡のしつぽ。片手間のミルクを空にした後アキドはリュックからペンを取り出しその全ての情報を紙に記録する。

「ありがとうございます村長」

「気を付けてとは言えんが無事を祈っておるよ」

立ち上がって深々と頭を下げるとアキドは部屋を後にした。

「あら、もうお帰り？」

「はい。お陰様でとてもいい話が聞けました。あつミルクごちそうさまでした」

居間で作業をしていたアレサにカップを返し村長の家を出発した。

アキドが去った後も村長は複雑な表情を変えなかった。自分が教えてしまったことである学者の二の舞になると恐れていたからだ。しかしそれと同時に奇妙な好奇心も感じていた。それは幼い頃、祖父から遺跡のことを聞かされたときに芽生えた好奇心と同じものだった。

第3話

薄い緑の雑草が散らばる草原の中アキドは歩いていった。

見晴らしがよく目的地である遠方の山脈がよく見える。もうかれこれ二時間は歩き続けていた。加えてこの太陽。いくら涼しい気候とはいえこうも歩きつぱなしだとさすがに汗も流れ出る。村で補給した水筒の水で発散した水分を何度も補う。それに今日目覚めてから何も食べていなかったたので雑草に紛れて生えている食用の野草を口にしながら歩を進めた。

それからさらに歩き続けていくと、ただっ広い草原にぼつんとそびえ立つ一本の大きな木が見えてきた。

「このへんで小休止といくかな」

アキドは木陰に腰掛けると荷物を降ろして少し休憩を挟むことにした。随分と山には近付いてはいるが発射したのが昼過ぎだったからな。着く頃には夕方もしくは夜になるだろう。夜の山の散策はさすがにナンセンスだ。などと木にもたれつつ前方の山を見据えながら考えているとき、上空で何かが横切った。

「ん？なんだあれ？」

一瞬何が空を飛んでいるのか分からなかったがよく見てみるとカラスらしき真っ黒い鳥が鷲を鷲掴みにして翼を羽ばたかせていた。カラスらしきと言っても体毛が黒いだけで大きさは並みのカラスの比ではないくらい大きい。

獲物を捕らえたその怪鳥はやがて前方の山脈へと消えていった。

「おそらく村の農場かなんかから、かつさらってきやがったな。しかしあんな大きい鳥までいるとはねえ。わざわざ狩人がこの地方までやって来るわけだ」

火照った体を木の陰がすっかり冷ましてくれ、アキドは再び草原を歩き始めた。

そろそろ夜行性の虫達が音色を奏でる頃の夕刻、広大な緑に包まれた山の全貌がその姿をはっきり見せ始めた。

山の麓付近は山道を作るのに開拓されたのか木々の間から光がまだ幾分にも差し込む密さ。しかしそれより上はまったく手付かずの密林と言ってもいいくらいに薄暗い森。山肌がまったく見えない。

この時間帯だからか山に棲む野生動物とは思えないような不気味な唸り声がかすかにだがこだましているのが聞こえる。

山に登るのは明日にしよう。

アキドは山道の入り口から少し離れたまだ草原地帯が残る場所で野宿することにした。

付近を散策し落ちていた小枝を集め火を点ける。今日の夕食はトカゲの丸焼きだ。とはいっても捕まえることができたのは小さいトカゲ一匹だけ。山の麓の林でも入れば少しはマシな獲物にありつけるだろうがあいにく雲が広がり月明かりが消されてしまつて真っ暗だ。

とにかく明日に備えるためこの日のメインはバッタ等の昆虫の串焼きになつてしまったのであった。

運悪く腹が満たされたところで月を隠していた雲は引いた。

宝石のように輝く夜空の星を見上げながらアキドは横になる。そしてあの学者の似顔絵が描かれた紙を手に取った。焚き火の炎で照ら

されたその紙をじつと見つめる。

「トムズ・ミラー…。

まさかあなたの息子が奥さんと同じ病気を患っているなんて思ってもみないでしょう。あなたが残した天空都市に関する研究書はどうしても手に入りたいがなんとも複雑な気分だよ」

そうつぶやき紙をしまうと焚き火の火を消しそつと目を閉じた。無論、いつ何が襲ってくるかわからないので武器である短剣を胸に抱いたまま眠りにつく。

時折山奥から響いてくる獣の鳴き声が子守唄となった。

早朝、日の出とともにアキドは行動を開始した。

山道は狩人が通るといっても日常的に踏みならされてはいないので所々草が茂っている。そして辺りは朝露で湿った森林が列を成していた。

日が昇って間もない朝は山鳥の動きが活発だ。姿は見せないが高く伸びた木々の葉上でガサガサと音を立てながら騒がしい。

そんな賑やかな山の中アキドはひたすら頂上を目指しまだ緩い斜面を登っていく。

気付けばもう陽の光がほんのわずかししか届かない密林地帯に入っていた。森から発せられる濃密な蒸気が一面を覆い尽くしている。

途中、道が分かれていたので帰りに迷うことがないよう近くにあった巨木に目印をつけておくことにした。腰に下げた鞘から短剣を抜き木の幹に突き立てようと腕を上げたその時、手の甲になにかが付着しているのが目に止まった。

アメーバ状の不定形な体を持ち、湿った森によく住み着く原始生物

スライムだ。

普段は半透明をしている彼の体色は吸い上げたアキドの血によって鮮やかなピンク色に染まっていた。どうやら全身に染み渡るまで吸い続けていたようだ。

「こういう森にはつきものさ。…けど」

アキドは慣れた手つきでスライムを鷲掴み乱雑にひっぺがすと思いつきり木の幹に叩きつけてやった。

べちゃっと四方に飛散するピンクのゼラチン質。

「ちょっと目を離れた隙にすぐこれだ。いちいち人の血を吸いやがるからな。しかしこの種のスライムにしてはやけに穩便だな。普通なら吸い付かれた瞬間に痺れてわかるんだけど」

手の甲から滴り落ちる血をポタポタさせながらまだ潜んでいないか周囲を注意深く観察する。そしてすぐに水筒の水で血を洗い流し止血する。

スライムは血の匂いを嗅ぎつけるとどんどん集まってくるのでアキドは早々にその場を離れた。

そろそろ山の中腹に差し掛かった頃だろうか。これまで続いていた山道もついに草木に阻まれ途切れてしまった。

「ここからは村長の言っていた獣道か」

行く手を塞ぐ名も無き植物達を掻き分け、少しでも開けた場所を探しながら進んだ。

こんなところでガサガサやってたらいっ魔獣の襲撃に遭うかわからない。

途中で頭上から降ってきたスライムを掴んでは投げ掴んでは叩きつけを繰り返し、急ぎ足でようやく見通しの効く明るい場所に辿り着いた。

平坦に広がったその先に陽の光がゆらゆらとうねるように反射しているのが見える。どうやら水源があるようだ。

血を洗い流したりして水筒の水も底をついていたのでちょうどよかった。

水辺に近付いて歩くアキドだったが異様な気配を感じ手前でピタッと足を止めた。体中に突き刺さる嫌な雰囲気の見線。

「なにかいるな…」

ここにきて初めて本格的に戦闘体制に入る。気配を殺しながら静かに短剣を抜き周囲に気を張り巡らせる。

周囲には障害物になるようなものは何もない。この位置からならどこから攻め入られても瞬時に対応できる。剣を構え聞き耳を立てていたその時…

「ガサッ!!」

物音とともに水辺の草むらから飛び出してきたのは大きなトカゲのような生物だった。といっても大きさは三十センチほどでしかなく固そうな、でこぼこの皮をまとっている。

「なんだよ。びっくりさせやがって」

思わず体の力が抜ける。しかしその生物をよく見てみると…

「こいつ！？あの古写本に載ってたワニじゃないか！」

そうだった。間違いなくそれは宿で開いた古写本に描かれている翼の生えたワニだった。

威嚇しているのか、その小さなワニは背中の皮膚の延長のような固い翼を大きく広げ細い声できゅきゅと鳴いている。

「ま、まさかこんな小さいやつだったとは…なんか拍子抜けだな。ってかなんであんな恐ろしく描いてあったんだろ」

愛くるしくも見える翼を広げたその小さな姿を見てアキドは構えていた剣を鞘に納め直す。

そう…その気の緩みがアキドを狙う本当の視線を見逃してしまっていた。

「ザアバァー！！！！」

水辺から立ち上る水しぶきとともに現れたのは大口を開けた巨大なワニ。水中から飛び出してきたというよりは水平にこちらに飛行してきたと言ったほうが正しかった。

「うわぁー！！」

ずらりと並べられた鋭い牙が一瞬でアキドの上半身を覆う。納めた剣を構える余裕などなかった。

「ギ…ギリギリ…セー…フ…」

刹那の瞬間、アキドはなんとかワニの口が閉じる前にアゴの上下を両手で押さえていた。

まったくの無防備の状態から襲われた焦りで冷や汗がどつと出る。化け物じみたその巨体から繰り出されるアゴの力は到底並みの人間に退けられるようなものではない。もはや腕がもがれるのは時間の問題だ。じわりじわりとアゴが閉じられていく…

「この…ままじゃ…まずい…な…リミッターを…はずさ…ないと…」

ささえる両手をプルプルと震わせながらアキドは無理矢理呼吸を整えた。

目を閉じ精神を…意識を…本来人が秘めている内なる力へと集中させる。

そして体中の全てを解放するかのようにカッと眼を見開いた。

その瞬間、閉じかかっていたワニの両アゴがとんでもない力でこじ開けられたのだ。

「うおおおー!!」

大きくこじ開けた両アゴを掴みながらさらにワニの体ごとそのまま押し進む。

翼を羽ばたかせながら必死にふんばるワニをものともせずアキドは押しのけ続けついに水辺へと突き戻してやった。

「はあ、はあ、はあ」

大きく肩で息をしながら水辺から後ずさるアキド。

「くそう…油断しすぎた」

一方、押し込められたワニは何が起こったのか把握しきれていない様子で水中からただ目だけを出しこちらを静かに見つめるのみであった。

しかし再度アキドと目が合うと怯えるように水中へと潜っていった。

状況を察したのか、もっぱらにいた小ワニの方はというとあんなに広げていた翼を折りたたみ身を小さく固めて全力で気配を消そうと必死だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0207/>

光と闇の足跡

2010年10月14日14時02分発行